

米国の幼児教育における五つの実験(十四)

—教師行動についての新しい研究の試み—

大戸 美也子

はじめに

六十年代の補償教育の定着、改善運動そして七十年代の公教育改善運動を通して次第にはっきりしてきたことは、教育改善に果たす「教師の役割」の重要性である。どのようなすべられた設備も教材もカリキュラムも、子どもたちと直接ふれる教師が有能で、知識をもっていない限り、質の高い教育を保障しないというものは、教育界の常識である。また、望ましい保育者の資質を明らかにしようとする努力も、関係者によって長いこと続けられてきたことで目新しいことではない。それにも拘らず近年、教師の問題が改めて注目されはじめたのは、第一に、特定の研究者以外の人々——政府の文教政策をすすめている人々や教師自体が、それぞ

れの立場から教師の資質の向上に関心をもちはじめ、同時にそのための具体的な試みをはじめたこと、第二に教師行動の研究法が近年改善され、現場への応用可能な成果を挙げはじめたこと、等の理由が考えられる。

第一の具体例として、政府による「児童発達協力者プログラム」(The Child Development Associate Program)の発足、教師による「ティーチャーズ・センター」設立運動があげられる。児童発達協力者プログラムとは、現場の保育者の技能(Klein)と態度の向上をはかるために、「保育の責任を果たし、幼児の集団を發展させる能力」(Klein, 1973 a, b, c)をもった熟練の保育者を現場(特に無資格者の多いデイ・ケア・センター)に、二か年位派遣してすすめる現職教育プログラムである。今日、高い資質を

もった保育者の選別基準、また現場の向上を測る方法の開発を、民間団体 (The Childhood Development Associate Consortium Inc.) に委託してすすめる一方で、いくつかの実験的プログラムもはじまっている。また、ティーチャーズ・センターとは、オープン・エデュケーションの普及と共に、永続的な資質向上を求める教師たちによって各地に設立されはじめている現場教師の学習、情報交換の場である。今日、米国では、英国のティーチャーズ・センターを模範として、その規模、運営、内容について各地で試行錯誤がつづけられている。

次に、第二の教師研究の変化として、「はっきりとらえられる一定の教師行動とその行動の子どもへの影響」をみる二者の相関関係の研究から、この相関関係が保育過程の他の要素の影響を受けてどれだけ変動するかという研究へ関心が移ってきたことが指摘できる。たとえば、ゲイジ (Gage) は効果的な指導者の資質に、文献を徹底的に分析した結果、次の五つの要素を見いだした。(1) 暖かさ、(2) 認知的組織力、(3) 構成力、(4) 非指示性、(5) 問題解決能力。ところが、今日多くの研究は、これらの要素は子ども状態、教科内容によってその効力は必ずしも一定しないことを証明しはじめている。

新しい研究の成果は、教師の資質のとらえ方、養成の仕方に新

しい根拠を与えたので、ここでは、新しい教師行動の研究成果の傾向をとらえることで、教育の質の向上への途を検討してみた。

一 効果的な教師行動に関するこれまでの研究傾向

効果的な教師行動の研究は、米国で最も数多くおこなわれている研究分野で、今日まで約一万の研究があるということである (Bridle & Dunkin, 1974)。しかし、組織的な観察法によって、実際の教師行動をとらえた研究数は十分の一以下に減り、幼児教育に限っていくとさらに減少し、「最も不毛の研究領域」(Gordon & Jager, 1973) ということになる。ビドル等がおこなった五百の教師行動の研究のレビューには、幼児教育は完全に除外されているし、ゴードン等のレビューでも、どのような形にしろ教師行動について組織的な記述法をもつてすすめられている研究は、六〇年代全体で十三しか見当たらないのであるから、先のゴードンの指摘は真実味をもっていると言えよう。七〇年代に入って、各種の実験的教育プログラムの有効性を教師の行動の観察を通して評価する傾向が出てきて以来、このような研究は若干改善されたものの、研究データから望ましい教師行動を描き出すことは殆ど不可能に近い。但し、ゴードンのレビューに使われた研究

表 教師行動の研究タイプ

	動機変数	経過変数			結果変数 子どものテスト結果	研究者名
		教室の条件	子どもの行動	教師の行動		
I				×		Hackett
II	× (信念)	×	×	×		Harvey Scott Brown
		×	×	×		
		×		×	×	Dilorenzo Conners Beller Soar Katz
III			×	×		Prescott Katz Kounin
			×	×		
			×	×		

のタイプを一覧してみる
と(表参照)、第一に、教師行動の類型化の研究、
第二に、教師行動に影響を及ぼす要素を分析する研究、そして第三に、教師の一定行動と子どもの成長あるいは行動の変化との関係をみる研究の三つのタイプの見られることがわかる。

行動(たとえば特定の指示行動とか、特定の指導法に関連する行動)のみを観察し、意図的に観察した事項、さらには、頻度の高い事項だけが、子どもの行動の影響因子として扱う傾向が強い。このような恣意的な研究の応用価値は、必ずしも高くないことは

言うまでもない。

二 効果的な教師行動の研究に関する新しい研究傾向

「非指示性」とか「受容性」という項目は、効果的な教師行動の要素として、従来安定した評価を得てきたが、「最適性に関する研究」の進展によって、この評価も修正されつつある。

(1) 最適性に関する研究

フロリダ大学のソアー(1968)は、教師の非指示的行動と子どもとの三種類の学習効果——語い、読書能力、創造性——との間に、非相関(nonlinear relations)の仮説をたてて研究をおこなった。つまり、創造性は教師の非指示的行動とプラスの高い相関を示すが、読書能力との相関は低下し、語いではむしろマイナスの相関を示すという仮説をたてたのである。結果は、この仮説が裏づけられたのみならず、非指示性の「程度」が子どもの学習の側面に異なる影響をもつことを明らかにしたのである。このような研究結果から、彼はさらに次のような仮説をたてた。

「より複雑で抽象的な学習の場合、非指示的であればある程その得点は高くなるが、より単純な学習では、ある程度の非指示性を越えると逆に得点は低くなり、学習効果を低める(逆U字型現象

象」(Sear, 1972 a, b)

教師の最適のレベルに関するアイデアは、他の研究で支持され、教師の非指示的行動は、教科内容の性格によってその効力に違いの見られる事が明らかとなった。同じようなことが、フランダーズ(1970a)の教師の子どもの考えの受容度に関する研究でも指摘されている。すなわち、小学校六年生では、受容度の高さと態度変容の間にはプラスの相関がみられるが、二年生ではむしろマイナスの相関となる。この研究では、子どもが発達段階によって、教師の受容的行動の影響が異なると指摘している。また、クーン(1970)の注意行動の継続研究では、第一日目と二日目以降とでは、注意行動の機能が変化してくるところを見出している。教師行動のタイミングに関する研究の重要性は、フランダーズ(1970b)も指摘しているが、具体的な研究はまだ実っていない。

以上の研究は、一定の教師行動が、学習内容の性質、子どもの年齢、またその行動の出現時期によって、その影響力に違いのあること、言い換えれば、予測しない他の行動要素が実際にはいろいろな形で子どもの行動を規定していることを示唆しているといえる。

(2) 生態学的な研究

特定の教師行動と子どものある行動の変化とを、簡単に結びつけることの困難さが自覚されてくると、自然な状態での子どもの多様な活動をとらえ、それらが場の特性とどのように関連し合っているかを注意深くみていこうとする生態学的な研究が重視されはじめた。人間行動の生態学的な研究は、レビンによって米国にもたらされ、パーカーによって発展してきた(Barker, 1968; Sem, 1975)。行動を文脈との関連でとらえようとする研究方法である。丁度、環境の性質によって植物分布が異なるように、人間においても、環境の性質と行動パターンとの間に一定の関係が認められ、どのような環境下で、どのような行動パターンが出現するかその全体的な分布を明らかにできるといわれる。一九五〇年代に、パーカーを中心に、中西部の子どもの行動の生態、大きな学校と小さな学校における子どもの行動の比較など行なわれたが、莫大な時間と経費と労力のかかるこの研究法は、その後衰え、七〇年代に入って再び注意されだしてきた。今日の生態学的研究は、パーカーの研究に比べ、行動のエピソードの記述も、それと対をなす行動環境の分析も大雑把であるが、この方法の活用によって、教室が複雑な行動環境から成り立っていることが認められてきた。

例えば、フェザーストーン (1974) は、教師の介入度によって教室内のすべての活動領域を分類し、子どもの領域選択行動から、子ども・保育者関係の質を類型化し、分布状況を明らかにしようとしている。このような研究の成果は、教室内に展開しているさまざまな子どもの活動状況 (Situational Gestalt) をとらえ、状況の発展にふさわしい教師行動を決定していかなければならないオープン・エデュケーションの教師に役立つものであるが、この研究の進度は極めて遅々としている。

(3) 相互交渉過程の研究

大規模な生態学的研究に代わるものとして、保育者—子どもの相互交渉のきめの細かい研究が最近注目されはじめてきた。この研究は、母性行動の分析のために発展してきたものであるが、従来の教師行動の研究では完全に見すごしてきた微妙な行動 (間のあけ方、視線等) に焦点をあて、その影響力をみている点、極めて得るところの大きい研究である。次に二、三研究の事例をみてみよう。

シャフナー (Schaffer, 1972) は、母子間の視線の合致 (Visual Synchrony) と子どもの社会化との関係について興味深い研究をおこなっている。いろいろな遊具のおいてある新しい環境に母子

を入れて、そこでの二人の相互交渉過程をみた。「乳児は、まず最初に遊具を見、次いで母親を見る。母親は乳児のそのような動きからある手がかりを得て、実にタイム、ミグ、よく子どもにに応じてから遊具を見る。……」この短かいエピソードの中で何が起こっているかという点、シャフナーは次のように解釈する。「目と目が合うことで、二人は環境の中のある面の興味を分かち合うのである」と。類似した場合は、保育の中でもしばしば見られることではないだろうか。「言葉かけ」だの「指導の手順」の中にだけ教育機能があるのではなく、このようなあまり価値をおかないできた行動の中にも大きな教育機能のあることをこの研究は伝えている。ニューサン等 (Newson, et al., 1972) も、母親が赤ん坊の発するシグナルを読んで直ちに反応する「行為 (Contented Reaction)」は、子どもの興味の形成にかかわる働きのあることを指摘している。

これらの研究のテーマは、毎日子どもをしつかり見つめ、交渉し合っている教師が経験的に「大切なこと」として把握している事柄と類似していないだろうか。子どもと子どもをとりまく人や物との関係を仲介していく保育者は、実際にはもっとさまざまな形でその仲介機能を果たしているように思われる。(注) 今後の重要な研究領域の一つと考えられる。

三 研究成果、共有の途

教師行動の研究法の変化は、教育現場の質の向上の一つの動機とはなっても、研究成果が現場でフィードバックされ、それを再調査できる流通システムがないと、現場にその成果を反映させることはむずかしい。英・米で次第に増大しているティーチャーズ・センターは、現職教師が相互に経験の叡知を分かち合い、互いに刺激し合う「教師の、教師による、子どもたちのため」の学習の場として注目を受けている。

「教師になる過程は、永続的な過程である」(大戸、一九七一)、我が国では、これから教師になる人のための養成活動(Preparation)は非常にすすんでいる反面、今、教師である人の問題解決のための組織的な援助活動(Peer-help)は極端に限られたものしかない。しかし、後者のサービスの充実は、保育の質の向上と一体となっているのであるから、今後、ますます現職教師の援助活動は強力に、そして組織的なものとなっていかなければならない。また、その一環として、今日各施設、団体で独自にすすめられている研究活動、研究成果を集合させ、分かち合い、それらを現場の充実に広く活用できる組織の開発も同様に必要なことである。米国においても、そのような組織のできたのは七〇年代に入ってか

らで、教育研究情報センター(通称 ERIC)という民間の団体が、英語で書かれたあらゆる教育研究を収集し、政府から委託を受けたイリノイ大学の情報交換所が、これの情報の流通にあっている。定期的に全論文の詳細な妙録とインデックスが刊行される。原資料もマイクロフィルムやハードコピーなどの形で入手できるような形になっており、また、不定期であるが課題毎に刊行される研究レビューは、関係者にとって極めて貴重なものである。最近では、米国の二大幼児教育誌「Childhood Education」「Young Children」も、研究課題別の文献目録を読者にサービスする仕事や、特集に合わせてERICコレクションから関連研究を紹介したりしている。

筆者の印象では、我が国の幼児教育界は他のどの国より教育熱心で、沢山の研究物が毎年刊行されているようだが、全く「たこつぼ」的に展開しているように思われる。研究物は限られた範囲にしか配布されないから、第一に入手することさえ困難で、ましてバック・ナンバーを揃えることなど至難のわざである。今夏、各地の幼稚園、保育所から刊行されたいろいろなタイトルをもった「研究誌」を読み比べ、共通のタイトルをもつものに沢山の内容の重複がみられた。現場が違うのであるから、共通の研究があつて良いのであるが、相互に情報交換できる場があれば、各所の

孤独の奮闘はむしろ生産的なものになったのではないかと思われ
た。情報の専有化状態を改善し、共有化してこそ人間の心と教育
の質を高める途があると思つてゐる。(ついで)

本 教師の仲介機能を重視する結果、最近の英米の文藝作家が、教師の働
きや agent (仲介) とか catalyst (触媒) とか transactor (媒介) とく
ら、言葉のあひだの間に流石のこぼれをみせてゐる。

文 庫

1. Barker, R. *Ecological psychology*. Stanford University Press, 1968.
2. Biddle, B., & J. Dunkin *The Study of teaching*. New York: Holt, 1974.
3. Featherstone, H. The ure of setting in a heterogeneous preschool. *Young Children*, 1974, 29(3), 147-154.
4. Flanders, N. *Analyzing teaching behavior*. Mass.: Addison-Wesley, 1970 a
5. _____ Teacher effective: A review of research 1960-1966. In R. Ebel (Ed.), *Encyclopedia of Educational Research*. Chicago: Rand McNally, 1970 b.
6. Gordon, I., & E. Jester Techniques of observing teaching in early childhood and outcomes of particular procedures. In R. M. Traverns (Ed.), *Second Handbook of Research on Teaching*. Chicago: Rand McNally, 1973, 184-217.
7. Gage, N.L. Teacher effective. In R. Ebel (Ed.), *Encyclopedia of Educational Research*. Chicago: Rand McNally, 1965
8. Klein, J. The development of the child development associate (CDA) program. *Young Children*, 1973 a, 28, 139-145.
9. _____ Symposium: CDA-The child development associate. *Childhood Education*, 1970 b, 50, 288-291
10. _____ Making or breaking it: The teacher's role in model (curriculum) implementation. *Young Children* 1973 c, 28(6), 359-316.
11. Kounin, J. *Discipline and group management in classroom*. New York: Holt, 1970.
12. Newson, J., & E. Newson Review. In B. Tizard, *Early childhood Education: A review and discussion of research in Britain*. London: NIEPR, 1974.
13. 大戸美也子 保育者養成の諸問題 『幼児の教育』 1971, 70(11), 36-39.
14. Scaffler, N.R. Studies in socialization processes in infancy. In B. Tizard, *Early childhood education*. London: NIEPR, 1974
15. Senn, M. Insights on the child development in the United States. Monograph of SRCD, No. 161. Chicago: SRCD, 1975.
16. Soar, R.S. Optimum teacher-pupil interaction for pupil growth. *Educational Leadership Research Supplement*, 1968, 1, 275-280.
17. _____ Teacher behavior related to pupil growth. *International Review of Education*, 1972, 18, 508-526.
18. _____ & R. M. Soar An Empirical analysis of selected Follow Through programs. Chap. 11 In I. Gordon (Ed.), *Early Childhood Education*. Chicago: NSSE, 1972, 229-259